

**平成 2 9 年**  
(2017)

# **あわら市観光白書**

平成 3 0 年 3 月

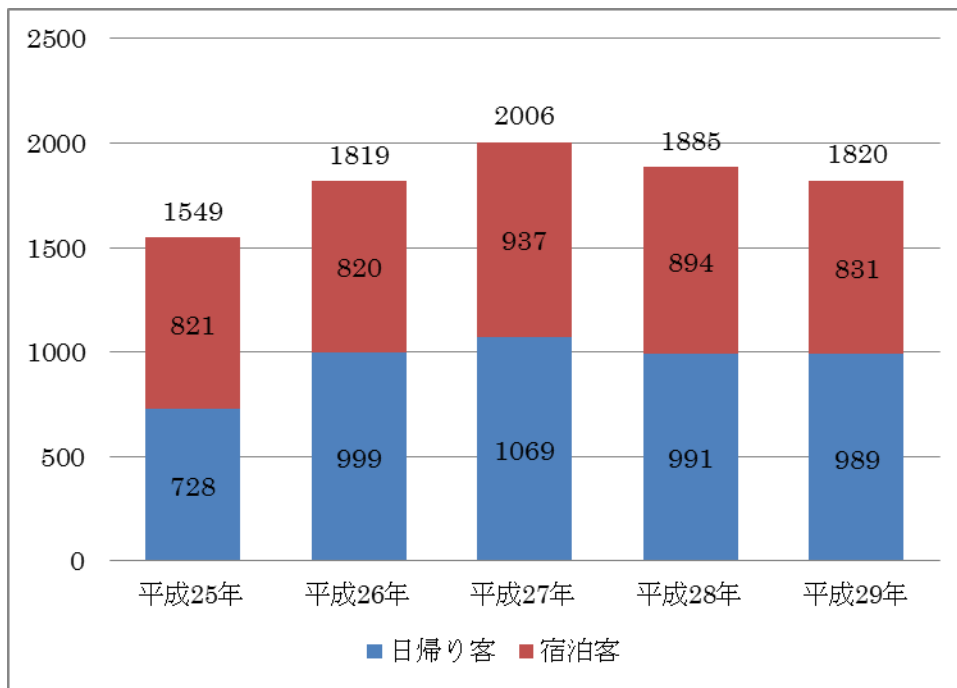
**あわら市観光商工課**

# 平成29年あわら市観光白書

## 1 平成29年実績

平成29年1月から12月までの1年間にあわら市を訪れた観光客は、1,820,200人（対前年比▲64,800人、3.4%の減）で、このうち宿泊客は831,500人（同▲62,000人、6.9%の減）、日帰り客は988,700人（同▲2,800人、0.3%の減）と、北陸新幹線金沢開業後3年目をむかえ、開業前と比較するとやや上回ってはいるもののほぼ同等の水準まで減少した。

図1：あわら市観光入込客数の推移



### I 観光地別観光客数

観光地別では、福井県随一の温泉地であるあわら温泉の840,000人が最も多く、次いで農産物直売所きららの丘の281,800人、芦湯147,000人、ゴルフ場133,300人、北潟湖畔95,800人、金津創作の森95,100人、その他（セントピアあわら、吉崎御坊、湯けむり横丁他）227,500人となっている。全体的に前年の入込客数を下回る施設が多い中、湯けむり横丁ときららの丘は増加に転じた。

### II 発地別観光客数

発地別内訳で見ると、県内客は53.7%の977,900人、県外客は46.3%の842,300人となり、おおむね半々に分かれている。

県外客の内訳をみると、関西方面（※1）からの観光客が334,500人（県外客の39.7%）と最も多く、次いで中京方面（※2）の173,400人（同20.6%）、北陸（石

川・富山) 方面の137,000人(同16.3%)、関東方面の124,900人(同14.8%)の順となり、関西・中京方面からの観光客が県外客全体の60%を占めている。北陸新幹線開業後に増加した関東方面からの割合は14.8%と昨年と比較すると0.1ポイントの減となっているものの、全体の客数が減少した中でも一定の割合を維持した。

(※1) 関西方面とは、大阪・京都・兵庫・滋賀・奈良・和歌山の2府4県

(※2) 中京方面とは、愛知・岐阜・三重・静岡の4県

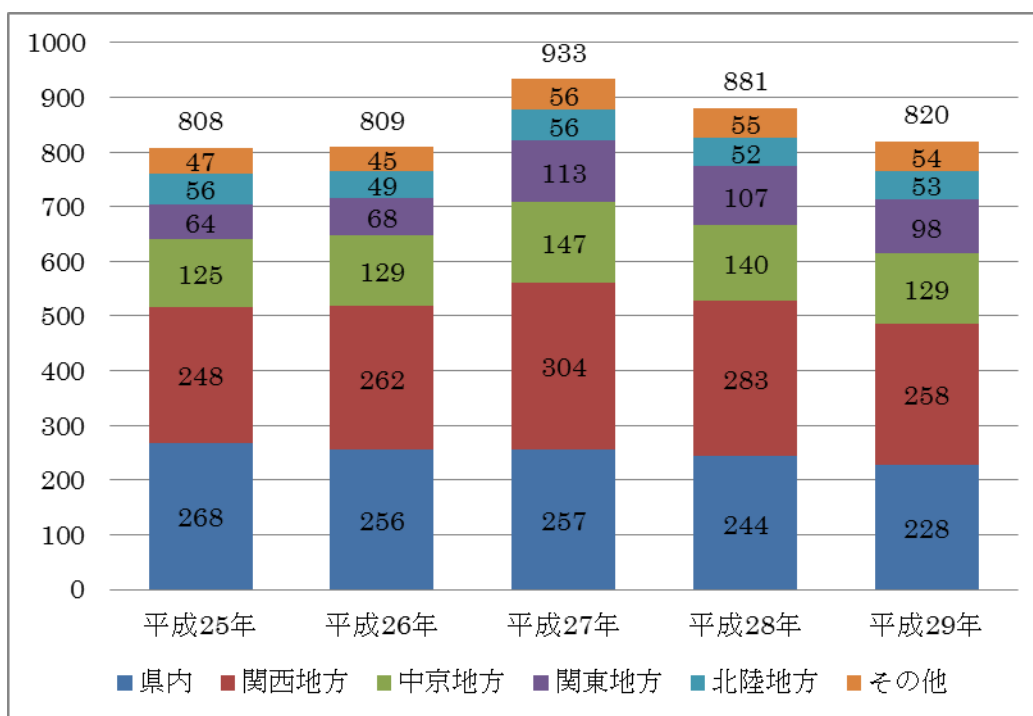
## 2 平成28年との比較

### I あわら温泉宿泊客発地別内訳の変化

あわら温泉の宿泊客は820,100人で、前年より6.9%の減少となった。北陸新幹線金沢開業後3年目をむかえ、あわら温泉や加賀温泉郷も宿泊客数が減少傾向にある中、金沢市の宿泊客数は依然として高い水準を維持している。富山県の温泉地の宿泊客数も開業前より高い水準を保っていることをふまえると、新幹線が開業した地域の経済波及効果は継続しているものの、金沢以西の未延伸エリアに関しては新幹線効果が更に薄れた1年であったと言える。

また、1月と2月が他の月と比較して落ち込みの度合いが大きいが、1月から3月にかけて、本県と同じくズワイガニを主力の観光商品と位置付ける「鳥取ふっこう割」が展開されたことも影響していると考えられる。

図2：地域別あわら温泉宿泊者数の推移

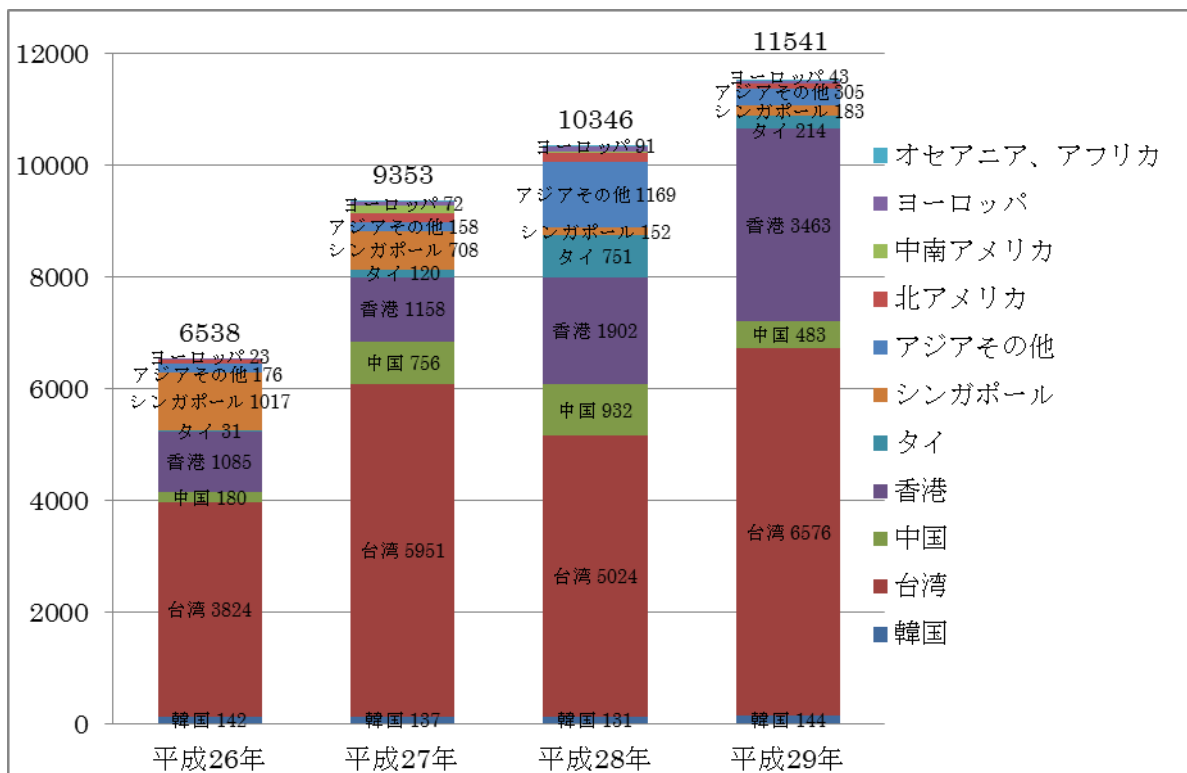


## II 訪日外国人観光客（インバウンド）について

あわら温泉の外国人宿泊者は11,541人と、11.6%増加しており昨年に引き続き10%以上の伸びを維持している。しかしながら、日本政府観光局（JNTO）が2018年1月に発表した2017年の訪日外国人客数（推計値）は、前の年に比べて19.3%増の2,869万1,000人と過去最高となったことからみると、あわら温泉の宿泊者数の伸び幅はまだまだと言わざるを得ない。

国・地域の内訳では、台湾からの観光客が最も多く、次いで香港、中国、タイからの観光客が高い割合を占めている。

図3：訪日外国人国別あわら温泉宿泊者数の推移



## III 主な観光地の状況

各観光地においては、湯けむり横丁ときららの丘を除いては減少傾向にあり、金津創作の森は、企画展の話題性や開催期間の天候等により、例年利用者に大きな変動があるが、今年は連休の日並びも影響し、減少が顕著であった。セントピアあわらについては5月に地の湯の内部壁が剥離し、その修復工事の為に延べ13日間休館していたことも影響していると思われる。

## IV 総合的評価

観光地ごとの状況は以上のとおりであるが、北陸新幹線の利用者数がほぼ横ばいであることや、周辺温泉地の宿泊客数が落ち込んでいることを考えると、金沢から一歩先へ呼び込む魅力が不足していると考えられる。今後は金沢を訪れた観光客を本市へ呼び込む流れを作ること課題のひとつとして挙げられる。

### 3 今後の対応

平成30年は福井しあわせ元気国体・元気大会が開催され、福井へ訪れる競技者や関係者等をしっかりとしたおもてなしの心と笑顔で迎え、あわら市のファンにし、リピーターへと繋げていかなければならない。

旅行のトレンドがその地域でしか経験できない文化体験や食体験など“コト消費”へシフトする中、「あわらならでは」、「あわらにしかない」にこだわり、個々の観光地や着地型旅行商品を磨き上げ、効果的に県内外に発信していくことが重要である。

また、民泊の解禁、『ななつ星』や『瑞風』などのクルーズトレイン(※1)、グランピング(※2)など、宿泊の形態やニーズが多様化する中で、旅館は更に厳しい競争にさらされると予想されるが、地元食材の活用やおもてなしの向上などで他の温泉地と差別化を図っていく必要がある。

さらに、北陸新幹線を活用し、福井県立恐竜博物館や永平寺での体験はもとより、県内の伝統工芸品産地などと連携しながら、首都圏からの教育旅行の誘致にも力を入れていく。

増加の一途を辿っている訪日外国人客数については、まだまだ伸びしろがあり、平成32年の東京オリンピックや平成35年の北陸新幹線敦賀開業を大きなチャンスと捉え、外国人観光客の受け入れ環境を整え、効果的なプロモーションを県や近隣市町と連携して実施していく。

(※1) 周遊型豪華寝台列車

(※2) テント設営や食事の準備を必要としない良いとこ取りの自然体験型宿泊施設の総称

## I 広域連携とインバウンド

広域的な観光戦略としては、昨年より県内を6エリアに分け、各地の観光素材をハード面、ソフト面の両方から磨き上げ、滞在時間を延長させることを目的とした「周遊・滞在型観光推進事業」(坂井・あわらエリア)がスタートしており、エリア内の観光地を周遊できるチケットの発行や、二次交通の拡充などを行う。

また、石川県加賀市とあわら市、坂井市、永平寺町、勝山市の5市町で構成する「越前加賀インバウンド推進機構」では2017年にスマートフォン向けアプリのリリースや、外国人向け情報端末「Pontana」を整備するなど、受け入れ態勢を強化する取り組みを実施した。

2018年度事業では、それらの情報端末から得られるビッグデータを活用し、エリア内の訪日外国人の観光動向を調査し更に今後の取り組みに反映させていく。

## II 人材育成及び着地型旅行商品の磨き上げ

北陸新幹線敦賀延伸を見据え、観光事業者だけに限らず、本市の歴史や食、文化について紹介できる人材を育成し、地域への愛着を造成するとともに、おもてなしの機運を高めていく。また、本県の北の玄関口であり、嶺北地域の観光拠点となる北陸新幹線芦原温泉駅(2023年春開業)の観光案内所の機能や二次交通の

充実について検討を進める。

様々な観光事業の主体となるあわら市観光協会の体制を強化するとともに、市内事業者や地元関係者と連携を図りながら着地型旅行商品の造成や磨き上げを継続し魅力の向上を図る。造成した着地型旅行商品を、まずは県内向けに販売し、利用者の声をフィードバックすることで、1年ごとに全国に通用するものにブラッシュアップしていく。

### **Ⅲ 新たな観光戦略の策定**

観光の方向性については市の総合振興計画を指針としているが、北陸新幹線敦賀延伸に向け、あわら市の観光を次のステージに引き上げるため、新たな観光戦略を策定し、観光施策を効果的に進めるロードマップを盛り込む。